

はじめに

新宮市教育委員会 教育長 速水盛康

人権尊重文集「春を呼ぼう」を今年度も小中学校の先生方のご指導とご協力により、発刊することができました。新市になってから第十四集となりましたが、この文集は、一九五五年（昭和三十年）に第一集が発刊されています。

発刊当時の人権を巡る社会情勢を見ますと、昭和二十六年京都で起こったオールロマンズ事件を契機に、『差別は実態の中にある』とし官民が一体となり差別解消への取り組みが進められました。当地方においても、昭和二十八年東牟婁・新宮市人権尊重委員会が結成され、その翌年、新宮市は分離独立し新宮市人権尊重委員会を設立し、新宮市独自の課題解決に向けた取り組みがスタートしました。このような経過の中で翌年、この人権尊重文集第一集が発刊されています。

『差別は実態の中にある』を学校教育では『事実を瞳のように大切にする』とし、児童生徒の長欠・不就学や問題行動の背景にあるもの（事実）を明らかにし、どの子にも豊かな教育活動を保障することに努めてきました。ここに書かれている作文も、まさに子どもたちの実態の中から沸き起こってきた事実であり、それを感性として受けとめ、豊かな表現力で文章として綴り、素直な心あふれた子どもたちの姿が作品に映し出されています。小学生から中学生への九年間の成長の様子も窺えます。未来へ向かう子どもたちの成長にとって、大切な資料として活用できる文集でもあります。

おわりに、未来を担う子どもたちへのメッセージとして、司馬遼太郎さんの『二十一世紀に生きる君たちへ』を紹介します。

君たちだけが持っている大きなものがある。未来というものである。私の人生は、すでに持ち時間が少ない。君たちはちがう。二十一世紀をたっぷり見ることができるようになるばかりか、そのかがやかしいにない手でもある。

ただ、私に言えることがある。それは、歴史から学んだ人間の生き方の基本的なことでもある。……人間は、助け合って生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

助け合うという気持ちや行動のもとは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることと言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。「いたわり」「他人の痛みを感じる」「やさしさ」みな似たような言葉である。

この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならないのである。その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中でつくりあげていきさえすればよい。

本文集発刊に当たり、ご尽力いただきました市内小中学校をはじめ関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

★小学生の部★

ぼくのうちの三きょうだい	高田小学校一年
ともだち なかよし	神倉小学校一年
ママとぼく	熊野川小学校一年
えがおがいいな	三輪崎小学校一年
生まれてくれてありがとう	王子ヶ浜小学校二年
みんなちがっていい	神倉小学校三年
大好きなお母さん	熊野川小学校三年
一生わすれられない思い出	王子ヶ浜小学校四年
いじめの重大さ	高田小学校五年
人の役に立ちたい	三輪崎小学校五年
自由と幸せ	王子ヶ浜小学校五年
無限大の言葉	高田小学校六年
プレゼント	神倉小学校六年
当たり前前に生活できること	熊野川小学校六年
歩けるようになる	三輪崎小学校六年

★中学生の部★

心の傷	熊野川中学校一年	峯園 なのか	11
臓器移植と人権	光洋中学校一年	魚立 祥大	11
人間であること	緑丘中学校一年	コノリー海シヨーン	12
パラリンピックのことを考えてみて	城南中学校一年	福田 紗夕	13
いじめについて	熊野川中学校二年	中川 怜大	14
言葉の力	高田中学校二年	添谷 梨桜	15
今の僕から一步踏み出そう	近畿大学附属新宮中学校二年	岡 寄 凜太郎	16
祖母の笑顔	光洋中学校二年	尾原 大和	17
にじいろ	緑丘中学校二年	横田 穂	18
自由な社会	近畿大学附属新宮中学校二年	矢萩 舞	19
本当の友達	城南中学校二年	近藤 杏	20
不登校と人権	近畿大学附属新宮中学校二年	堀内 輝之	21
世界の子どもを助けるためには？	熊野川中学校三年	永谷 邦満	22
いじめはなぜなくなるのか	光洋中学校三年	小林 莉子	23
私の人生	緑丘中学校三年	小西 柚	24
言葉	城南中学校三年	傳田 未咲	25

小学生の部

ぼくのうちの三きょうだい



高田小学校一年 おかもと いつき

ぼくには、おとうとのしゅうとがくおにいちゃんがあります。まず、おとうとのしゅうのことをはなします。

しゅうは、いつもぼくといっしょでにこにこしていたり、わらったりしています。ぼくは、あんしんします。

おにいちゃんは、ぼくが小さいときにじてん車にのるのを手つだってくれました。だから、いまはのれるようになりました。それにおにいちゃんは、いろんなものをゆずってくれます。ぼくは、すごくうれしいです。

まい日、かえってきてからしゅくだいをおわらせたあとのたのしみは、しゅうとレゴであそぶことです。すぐたのしいです。

おにいちゃんとぼくは、しゅくだいをぜんぶおわらせたなら、いっしょにいぬのさんぽにいきます。そのおかげで、しゅくだいがはやくおわります。おにいちゃんといっしょにさんぽにいくと、いつもならそんなにできないたのしいはなしやおもしろいはなしができて、すごくうれしいです。

しゅうがケガをすると、ぼくとおにいちゃんがかけつけます。おにいちゃんがおかあさんのところまで、しゅうをおぶって、

「ピーポーピーポーきゅうきゅう車がとおりまあす。」

と二人でいいながらつれていってあげます。そうするとしゅうがちよっとだけわらいます。それを見てぼくは、あんしんします。

ぼくとおにいちゃんは、ケンカごっこをします。ぼくとおにい

ちゃんがケンカごっこをしていると、しゅうがつっこんできます。すると、もっとおもしろくなります。ケンカごっこはすぐたのしいです。これからはなかよくしていきたいです。

ともだち なかよし



神倉小学校二年 山本 りゅうし

ぼくは、一年生になって、ともだちがたくさんできました。まいにちたのしいことがまっています。たのしいことがあると、こころがぼかぼかして、いいきもちです。たのしいことがふえると、うれしいです。

それに、ともだちは、とてもやさしいです。

ともだちは、さんすうのべんきょうをおしえてくれました。

「このもんだいはこうやるんだよ。」

とおしえてくれました。だから、じぶんもべんきょうがはかどりました。こころの中で、「ありがとう。」といえました。とてもうれしかったです。またおしえてくれるといいです。もっとなかよしになりたいです。じぶんでやるほうがいいですが、おしえてくれたらほっとします。

ともだちを百人つくりたいです。これからも、ともだちといっぱいあそんで、そのともだちとなかよしになります。

ママとぼく



熊野川小学校一年 にしやま そら

ぼくは、きのう、せんたくものを一人で取りました。なぜかという、おかあさんがしんどかったからです。かぜでしごとをやすんでいました。きょうのちょうしは、おなががいたいといっていました。

せんたくものいれは、たまにおかあさんといっしょにするけど、おかあさんのちょうしがわるかったから、一人でやりました。せんたくものがおもたかったです。パパがほめてくれました。うれしかったです。

ママは、きょうも休んでいます。ママは、びょういんへいきました。ぼくは、ママがしんぱいです。

えがおがいいな



三輪崎小学校一年 なかひら こはね

わたしは、三にんきょうだいのまんなかです。三ねんせいのおねえちゃんと三さいのいもうとがいます。

おうち、いつもにぎやかです。まい日けんかばかりしています。

こないだもおもちゃのとりあい、わたしといもうとが、けんかになりました。わたしがつかっていたおもちゃを、いもうとが

かってにとっていったので、

「とらんといてよ。」

という

「わたしが、さきにつかいやったんやで。」

とおこってきて、大げんかになってしまいました。

そして、いもうとは、おかあさんにおこられて、ないていました。それを見て、わたしは、いもうとがかわいそうになってきて、

「いっしょにえをかこう。」

という

「いいよ。」

といってくれてうれしかったです。

そして、いっしょにえをかいたら、とてもじょうずだったので

びっくりしました。わたしは、おもわず、

「じょうずやね。」

といったら、

「ありがとう。」

といって、わらってくれたので、うれしかったです。

そして、なかなかおりました。ふたりともえがおになりました。

やっぱりえがおは、いいです。

おねえちゃんとは、あまりけんかをしません。それは、おねえちゃんが、やさしくしてくれるからです。わたしもこれからは、いもうとにやさしくしてあげたいとおもいます。

やっぱりえがおは、いいです。

これからも三にんのえがおがいっぱい見れるといいな。

生まれてくれてありがとう



王子ヶ浜小学校二年 さか本 てっしん

ぼくのおかあさんは、夏休み中に赤ちゃんを生みました。赤ちゃんは、八月一日に生まれました。ぼくは、たのしみにたのしみにまっていたので、生まれてくれて、めちゃくちゃよろこびました。ぼくは、もう、おにいちゃんになりました。

赤ちゃんの名前は、「音は」といいます。なみの音が元気に聞こえる夏に生まれたから、おとうさんが、そうつけました。ぼくも気に入っています。ぼくは、

「音ちゃん」

ってよびます。赤ちゃんだから、びっくりしないように、小さいやさしい声でよびます。

でも、音ちゃんは、ねているときが多いです。ぼくが学校に行くときはいつもねています。お休みの日は、音ちゃんがおきるのが見れます。音ちゃんは、おきるといつもわらってくれます。音ちゃんがわらうと、ぼくもつられてわらってしまいます。

音ちゃんは、今はもう三か月になりました。もっと大きくなったら、公園へつれて行ってあげたいです。公園へ行ったら音ちゃんはなにしておそびたいって言うかな。音ちゃんがしたいあそびで、あそんであげたいです。

みんながっついていい



神倉小学校三年 中田結々

わたしの弟はダウンしょうです。

わたしたちの体の中には体を作るせっ計画があります。そのせっ計画は四十六本できています。でも、ダウンしょうの子はわたしたちより一本多い四十七本です。一本多いせいで、わたしたちより少しせいの長がゆっくりになってしまいます。わたしはそんな子たちを「ゆっくりちゃん」とよんでいます。

わたしの弟は歩けるようになるのがおそかったです。歩けるようになるため、いりょうセンターに行っていっぱいリハビリをしました。今は練習したおかげで走ることもできます。

十月に、大さかで開かれたゆっくりちゃんたちのイベントに行きました。約二千人の人が集まりました。その日はみんなにゆっくりちゃんたちを知ってもらうために、大さかじょうのまわりを歩きました。みんな見ていたので、ゆっくりちゃんのことを知ってもらえたと思います。こんなイベントが世界中で行われているそうです。

世界には、いろいろなゆっくりちゃんがあります。わたしの弟は、ゆっくりちゃんの中ではせいの長が早い方です。少しおそいゆっくりちゃんもいます。せいの長が早くてもおそくても、わたしはゆっくりちゃんのことを大すきです。

みなさんは、金子みすゞさんの「わたしと小鳥とすずと」という詩を知っていますか。

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、

とべる小鳥はわたしののように、
地面をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすつても、
きれいな音はでないけど、

あの鳴るすずはわたしののように
たくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

この詩はとてもすてきだと思いました。すずや小鳥のかわりに
「ゆっくりちゃん」を入れると、みんなにもゆっくりちゃんのこ
とが分かってもらえると思います。

わたしは、この間ダウンしょうの金ざわしょう子さんが字を書
いているところを見に行きました。気持ちをこめてゆっくり書い
ていて、とてもきれいな字でした。とても楽しそうに書いていま
した。しょう子さんは、いっぱい練習して書けるようになったそ
うです。わたしもこの間までさか上がりができませんでした。で
も、毎日いっぱい練習したらできるようになりました。わたしも
しょう子さんも同じだと思いました。

「みんなちがって、みんないい。」

「みんな同じで、みんないい。」

一生けんめいがんばることが大事なんだと思いました。

大好きなお母さん

熊野川小学校三年 仲 桜良



わたしは、お母さんが大好きです。

なぜかと言うと、お母さんは、やさしいからです。わたしが悪
いことをしたり、兄弟げんかをしたりして、ないてしまったら、
お母さんが、はげましてくれれます。そういう、お母さんも大好き
です。

お母さんは、みんなでごはんを食べてから、みんなのお皿をあ
らったり、ふとんをしいたりします。それから、弟がおふろから
あがったらふいたり、服を出したりします。わたしたちがおふろ
に入ってから、さいごに、おふろに入ります。おふろからあがっ
たら、みんなのせんたくをします。お母さんは、ねる時間がすご
くおそいです。

でも、お母さんは、朝早く起きます。お父さんのおべんとうを
作り、わたしたちの朝ごはんを用意してから、わたしたちを起こ
してくれます。それから、弟も起こしに行つて、服を着がえさせ
ます。そして、弟のごはんを用意して、保育園の用意をして、園
服を着せて、わたしたちと弟を学校や保育園に送ってから、仕事
に行きます。

お母さんは、すごくがんばっているなと思います。

そうやって、がんばって仕事や育児をしているお母さんが大好
きです。

一生わすれられない思い出

王子ヶ浜小学校四年 中 岸 さくら



私には九十五才のひいおばあちゃんがありました。ひいおばあちゃんは、私にとってもやさしくていっしょに買い物に行ったらおかしなどをいつも買ってくれました。九十才でも歩いてスーパーに行っていたおばあちゃんが四月一日にきゅうきゅう車で運ばれました。お医者さんには、いつ亡くなってもおかしくないと言われていました。そんな中、ひいおばあちゃんがいつも言っていたことがあります。

「さくらがね、みんな今いそがしいからまんまいちゃんになったらあかんでって言ったんや。」
と言っていたそうです。私自身、言ったおばえはありませんが、私の名前をおぼえてくれていたことはとてもうれしかったです。

その後ひいおばあちゃんの病気はなおりませんでした。少し元気になり四十日間病院で生活した後、私のおばあちゃんの家へひいおばあちゃんのおたんじょう日の前の日に帰ってきました。たまに歩いてこけたりしていても、みんなが笑うとひいおばあちゃんも笑っていて、とても楽しい日々が続きました。十月二十一日、ひいおばあちゃんの体ちょうが急に悪くなりました。そして二日後、私がお母さんと買い物に行っている間に、ひいおばあちゃんは亡くなりました。急いで帰ると、ひいおばあちゃんの体はまだあたたかかったです。おそう式の日、ひいおばあちゃんの手紙を入れて焼きました。焼き終わってから亡くなったときよりも泣きました。わたしはまた、ひいおばあちゃんに会えたら今までの感じの気持ちを伝えたいです。

いじめの重大さ

高田小学校五年 溝 口 ゆい



私は、「いじめ」についての、授業をうけました。そして、授業の中で、いじめることが人の心をきずつけるという重大さを知りました。ちょっとした、遊び半分のいやがらせから、りっぱな犯罪にまでおよんでしまうこともあるのです。たとえば、人をけったり、たたいたりのぼう力や、人にふれなくてもいやなことを言ったりすることです。お話の中で、同級生にかばんをむりやり押しつけられて、男の子が後ろに転んで頭部にけがをしてしまったことがしょうかいされていました。小学五年生でもけい察官に、とり調べをされることだってあるそうです。その話の中では、つらい思いをするのは、かばんを押しつけられてけがをした本人だけではなく、その時初めて子どもが、いじめられていたと知った本人の親や、けがをさせてしまった子どもの親もつらいのです。もし、私ができるような場面に立ち会った時、見て見ぬふりをせずに、すぐに、かけ寄ってあげて、大人の人をよんで、助けてあげたいです。そして、自分に悪気がなくても、受け止める相手にとって、は、いやなふうにいることもあるので、言葉には気をつけて、生活しなければならぬと思います。

私の小学校は、小さな学校なので、そういったいじめはほとんどありません。もし、あったとしても、その場で話し合っ解決します。でも、大きい学校では、いじめが確実にないとは言えないかもしれません。

小学校でも、中学校でも、高校でも、一年に三回ほど、いじめアンケートがあります。アンケートなどにいじめられている、あ

るいは、いじめられているのを見た、ということを書くことは大
事なことです。書かなければ、いじめられ続けて、自分の心がど
んどんつらい気持ちでうめつくされていくだけです。なので、自
分がいやだ、こまっているといったことは、まわりにいるだれか
に伝えることが大切だと思います。

私には、人をいじめる人の気持ちが分かりません。人がいやがっ
ているのを見て、何が楽しいのか分かりません。ですが、私は、
いじている側の気持ちを少しでも分かればいいと思いました。
気持ちを分かることができれば、もし、注意をする際に、その人
の心をきずつけないで、いけないことだと気づかせてあげること
ができるからです。いくら人をいじているといっても、その人
達も、同じ人なので感じることはいっしょです。

どんな人に対しても、思いやりをもって、人の心をきずつけな
いように接してあげたいと思いました。

人の役に立ちたい

三輪崎小学校五年 松 本 希 和



わたしは、四年生のころ母が読んでいる新聞で、男の子がヘア
ドネーションをしたという記事を見た。わたしは、ヘアドネーショ
ンとは何かを知らなかったので、母に聞いてみた。ヘアドネーショ
ンとは、病気や事故などでかみの毛を失った子どものためにきふ
されたかみの毛でウィッグを作る活動だと知った。一人の子ども
にウィッグをおくるのに、二十人から三十人分の三十一センチメー
トル以上の長さのかみの毛が必要だと知り、わたしはその言葉が

心にひっかかった。

何日かたって、わたしは母に新聞で見たヘアドネーションをし
た男の子のことをくわしく聞いた。その男の子は、いところが病氣
でかみの毛がなかったことを知り、年長から五年生までかみの毛
を伸ばした。その間に女の子にまちがえられるなどつらい思いを
した。しかし、男の子は、

「自分より病氣で苦しい思いをしている子の方がつらい思いをし
ているから大丈夫。」

と言い、五年生までかみの毛を伸ばし続けた。わたしは、この話
を聞いて、ヘアドネーションをする決意をした。わたしだったら、
女の子だからまちがえられもしないし、人の役に立てるなら立ち
たいと思ったからだ。

それからわたしは、一年半かみの毛をのばした。四年生の春、
母が行っている美容室で三十一センチメートルかみの毛を切った。
やっと、人の役に立てた。わたしは、気持ちよくなり、心がすっ
きりした。子どもでヘアドネーションをする人が少ないと知り、
自分のやったことにうれしさを感じた。

五年生になった今も、わたしは母と一緒にかみの毛をのばして
いる。わたしは、ヘアドネーションに取り組んでみてよかったと
思っている。わたしのかみの毛が、だれかの役に立っていると思
うと本当にうれしくなる。みなさんも人の役に立ちたくなったら、
ヘアドネーションにチャレンジしてみてもどうだろうか。わたし
は、これからもっと人の役に立ちたいと思う。

自由と幸せ

王子ヶ浜小学校五年 大矢 胡 春



私は、自由は幸せにつながると 생각합니다。

前は、自由と聞くと、全て自分が好きなことをやりたい時にやれることだと、思っていました。みなさんは、どう思いますか。

私は、道徳の時間に、『うばわれた自由』、『だれもが幸せになれる社会』という話を読みました。そして、自分が思っていた自由や幸せは、本当の自由や幸せと違うと気づきました。

もし、世界中の人々が、それぞれ自分が好きなことを自分中心でやっていたら、どうなると思いますか。もし、欲しい食べ物があったら、お金を払わずに持って帰って食べてしまうことになるでしょう。

また、その食べ終わったゴミを、ゴミ箱に捨てるのが面倒で、どこにでも捨ててしまい、街が汚く、見た目が悪くなってしまいうでしょう。このように、自分中心に生活していることを続けていると、私は、危険でみだれた世の中になり、これは、自由ではなく、わがまま・勝手になると思います。

では、本当の自由とは何でしょう。私は、たくさんのルールを守りながら、楽しく暮らしていくことだと思います。逆に言うと、楽しく暮らすためにルールがあるのだと思います。

次に、私は、幸せになるということは、おいしい物をたくさん食べたり、一生がい健康に暮らしたりしていくことだと思います。みなさんもそう思いませんか。でも、私は、話を読む中で、この私が考えていた幸せは、自分だけになる幸せで、他の人もなる幸せではないと考えるようになりました。

例えば、病気などで、見た目が変わったからといって差別されたり、時にはその病気になっている人の家族も苦しめられたりすることがあります。その人たちにとっての幸せは、差別がなく、みんなみたいに、友達や家族、先生など、たくさんの人に囲まれて、勉強をしたり、遊んだり、仕事をしたりして過ごせることだと思います。今、私たちが当たり前のように暮らしていることが、実は、幸せだと考える人がいることを知りました。

私は、今回、この二つの話を読み、自由や幸せの意味を間違えて認識してしまうと、一人ひとりが必ずもっている権利「人権」を失ってしまうことにつながると考えました。

みなさん、自由で幸せに暮らせているか、振り返ってみてください。そして、本当の自由、それは、ルールを守ること、楽しく暮らせていることを感じて下さい。自分だけではなく、周りの幸せも考えて行動できることを目指してみませんか。

そうすると、自由は幸せにつながると 思います。

無限大の言葉

高田小学校六年 山崎 音羽



今を生きる私たちの周りには、「言葉」があふれています。日々の生活の中での会話やメールのやり取りなど、「言葉」を使う場面はたくさんあります。しかし、近年、メッセージアプリなどが普及する中で、直接会話することが減ってきています。

そこで、私は、直接会話することの大切さについてを伝えたいと思います。「言葉」には、様々な種類があります。人を氣遣う

「言葉」や反対に傷つける「言葉」、感謝の「言葉」や謝罪の「言葉」などもあります。私は、言葉の中でも、感謝の「言葉」と謝罪の「言葉」は、特に大切なものだと思います。例えば、感謝の「言葉」は、「ありがとう」や「ありがとうございます」、「感謝します」などが、謝罪の「言葉」では、「ごめんなさい」や「申し訳ありません」などがあります。私は話す相手や場面によってこんなにも変化する「言葉」は、この二つしかないと思います。

ところでみなさん、「言葉」のない世界を想像してみてください。もしも、「言葉」のない世界があったとしたら、私はそこはきっと人と人とのつながりがない寂しい世界だと思います。また、「ありがとう」や「ごめんなさい」などの感謝や謝罪の「言葉」がなくても寂しいと思います。私たちが自分の思いを自由に伝えられるのは、この「言葉」が存在しているからこそできるのです。もし、この二つの「言葉」が存在していなかったら、私たちは誤解を招くことをおそれ、自分の思いをだれかに伝えることを放棄していたかもしれません。つまり、「言葉」とは、日々の生活の中で重要な役割を担っているのです。今、みなさんが使っているメッセージアプリなども「言葉」があるからこそできているのです。どうでしょう。今の世の中が「言葉」の力によって成り立っていると思うと「言葉」に対して敬う気持ちが出てきませんか。

人類は、その長い歴史の中で、さまざまな知恵や道具を手に入れました。また、「言葉」は、時代ごとに多種多様な形に変化し、現代まで受けつがれてきました。つまり、私たちが、日々何気なく使っている言葉は、幾多もの偶然と奇跡によってできているのです。

私は、「言葉」とは全ての物事の原点だと思います。それと同時に「会話」とは、人と人をつなぐ「架け橋」だとも思います。「言葉」が「会話」が人々の間で広がっていく、それは、一つの

時代でもどこの国でも変わらないことだと思います。

この作文を読んでいるみなさんにも「言葉」が人と人をつなぐ「架け橋」となってほしい、そして、直接会話することの大切さについて考えてみてほしいと思います。

プレゼント



神倉小学校六年 傳田 美樹

みなさんは、自分の名前や命についてしっかりと考えたことはあるだろうか。命や名前は親からもらった人生最大のプレゼントだ。

私の名前は、父に名付けてもらった。しかし、その父は、九月二日をもって他界した。その後、私は父を忘れずに、自分の名前をしっかりと書くようになった。なぜかというと、名前は私にとって父からもらった大切なプレゼントだからだ。正直言うと、これまでの人生で、自分の名前を適当に書いてしまうことがあった。だが、父が亡くなってから、自分の名前の大切さや大きさに気付いたのである。そんな私だからみんなに言えることがある。自分の名前を適当に書くことはやめよう。名前を書くときは、名前をつけてくれた人のことを思い出してみてもいいだろうか。きっと丁寧に書けると思う。

次は、命の大切さについて話していきたい。「死ね」という言葉を簡単に使ったことはないだろうか。みなさん深く考えてみてはどうだろうか。世の中には私の父のように、生きたくても生きられない人が数えきれないほどいることを。例え、軽はずみな気

持ちだとしても、そのような言葉は相手を深く傷つけてしまう可能性はある。だから「死ね」といった言葉を使うことはやめてほしい。人の心を傷つけることは、自分のことを傷つけることと同じである。なぜなら自分の行動は必ず自分に返ってくると私は思っているからだ。

そして、言葉だけではない暴力もだ。人間だから時には、腹がたったり悔しい思いをすることはあると思う。でも感情に任せて暴言や暴力は絶対によくない。暴言や暴力では何も解決しない。何かあったら、周りの友達や先生に相談にのってもらおう事。この事を忘れないでほしい。

最後に自分の名前にはそれぞれの意味がある。だから書くことをめんどくさいと感じた時、親の顔や、私が今みんなに伝えていることを思い出してほしい。そうすれば、丁寧に名前を書けると思う。そしてこれからの学校生活で命を大切にし、名前をしっかりと書くことを忘れないでほしい。これが私がみなさんに伝えたい、そして守っていききたい人権である。

当たり前前に生活できること

熊野川小学校六年 中 前 なごみ



私たちは、いつも当たり前前に生活している。私が考える当たり前前の生活は、ご飯が食べられること、手や足が自由に動かせたり、学校に行ったりできることだと思う。でも、そうできない人もたくさんいる。

私は、おさないころ、

「なぜ、手や足が自由に使えないのだろう。」

と思うことがあった。目が不自由な人や耳が聞こえない人がいることも知った。私は、大きくなって分かった。その人たちは、なりたくてそういう状態になったわけではない。事故だけがをしたり、生まれる前に何かの影きょうがあったりして、体が自由に動かない人もいる。

四年生の時に、オトタケさんのことを道徳の学習の中で知った。オトタケさんは、生まれつき、手足が使えなかった。でも、服を自分で着たり、車を運転したりすることもできる。もし、私なら自分でやりたいと思っていても、できないだろう。オトタケさんは、私ができないと思うことを実際にしている。それは、オトタケさんの努力の積み重ねがあったからこそであり、周りの人たちの支えがあったからだと思う。

私たちも、いつ事故に巻き込まれたりするかわからない。いつ何が起こるかわからない。今は、ガンなど色々な病気がある。いっただれが病気になってもおかしくはない。病気ではなくても、年をとったら足が痛くなったり動けなくなることもある。ふだん、生活できることが当たり前前にできなくなるかもしれない。だからこそ、今、自分ができていることを大切にしたいと思う。

私が、毎日、当たり前前に生活できているのは、色々な人のおかげだ。私を生んでくれたお母さん。一生けん命仕事をしてくれているお父さん。お母さんとお父さんを生んでくれた、おじいちゃんとおばあちゃん。いっしょに遊んでくれる、お兄ちゃんや弟、妹。他にも、先生や友達、近所の人たち。色々な人たちに支えられながら、私は、当たり前前に生活し、幸せに生きることができている。当たり前前に生活できることに感謝し、周りの人たちへその感謝の気持ちを伝えていこうと思う。

歩けるようになる

三輪崎小学校六年 植村 晶斗



ぼくはお母さんに感謝しています。お母さんは、ぼくを、予定日より三ヶ月早く、9百グラムで産んでくれました。すごく小さく生まれたので、担当の先生に、

「あと一日しか生きられないかもしれない。」

と言われたそうです。でも、今は十一年も生きられています。

産まれた時はまだ、障がいを持っていることが分かっておらず、ぼくが三歳のときにわかったそうです。そのときお母さんは残念に思ったそうですが、僕はなにも思いませんでした。

また、ぼくは、友達やまわりの人にも感謝しています。なぜなら、ぼくが階段を上ったり、降りたりしているときに「がんばれ！」と声をかけてくれたり、ランドセルや給食などぼくが持てないものを運んでくれるからです。休み時間には、ぼくの教室に遊びにきてくれます。ぼくの友達は、ぼくを障がい者としてではなく、友達として接してくれるので、とてもうれしいです。

ぼくにはしたいことがあります。それは、友達の家に行って遊ぶことです。なぜなら、休みの日に友達と遊ぶ時、いつも友達が家に来てくれるので、たまにはぼくが、友達の家に行って遊んでみたいからです。

でも、それをするには、歩かなければならないと思っています。だからそのためには、リハビリをしなければなりません。リハビリをするのは疲れますが、歩けるようになったら好きなことができるので、ぼくは、これから歩けるようになるために、リハビリをがんばっていききたいと思います。



中学生の部

心の傷

熊野川中学校一年 峯 園 なのか



いじめは、人の心を傷つける。きっとその傷跡はいつになっても消えないだろう。

いじめは自分自身が『いじめ』だと思ったりそれはいいじめだと思ったり。相手に悪気がなかったとしてもだ。でも、相手をいじめた人は自分がしているひどさに気づいてないと思う。何のためにいじめているのだろうか。ストレス発散？しつと？気にくわないだけ？そうやって追いつめられる人もいるだろう。私は、そうやって考えすぎて、何もかもがいやになる。「ほっときな。考えすぎないほうがいいよ。」そうは言っても実際は考えないわけがない。きっと何か理由があるのだろう。でも、相手ばかりを気にして自分を変えてたら、いつかは自分ではなくなる。個性はそのままに、だから、相手のことを気にするのはいいことだ。でも、気にしすぎると、自分がパンクする。私はこう思う。いじめたことがある人はいじめられた側が悪いということになっているのではないかと思う。つまり、泣く方が悪いから泣かしてよいと同じような意味になる。それは絶対に違う。私は、泣くようなきつかけをつくった人が悪いと思う。いじめられた側が悪いと思っている人はもう一度考え直した方がいいと思う。次は、いじめられているところを目撃した人だ。一番良くないのが見て見ぬふり。いじめられている人も、口には出せなくても、きっと心の中ではSOSを出していて、きつと気づいてほしいと思う。でも私はいやなことをこ

とをされたらきちんと「やめて」とか「何で」とか口に出せるような人になりたい。そうは言っても、私は言葉がすぐにうかばないで、後で後悔するタイプだから実際では言えない。

だから、陰で悪いことをしてても、絶対に誰かが見てると思う。やっぱり、対策とかを考えて、心の傷が大きくなる前に、薬をぬった方がいい。たまには、ストレス発散して、予防をするべきだと思う。いじめている側の人は自分がしていることを見直した方がいい。『いじめ』は何もうみ出さないから。

臓器移植と人権

光洋中学校一年 魚 立 祥 大



僕のお父さんは、看護師をしていて以前臓器移植の勉強会に行っていたことがあったので今回この人権作文を書く前に家族で臓器移植について話をしました。そして、この話の中でドナーカードについての話をしました。ドナーカードとは、臓器移植についての臓器をあげたいか、あげたくないかの意思表示をするためのカードです。

僕は家族と話をした後、ドナーカードや臓器移植に興味を持ち、さらに調べてみました。そして、提供する権利、提供しない権利があることを知りました。そして、僕はもし大切な人が脳死になっってしまったら、僕はその人がドナーカードに臓器提供をしてもいいと書いていても、臓器提供をしてほしくないと思いました。理由は、脳死の場合はまだ体が生きていますが、臓器提供をしまうとその人は死んでしまいうからです。でも、自分が脳死になっ

てしまったら臓器提供をしたいです。なぜなら、臓器提供をして自分が死んでしまっても、自分が提供した臓器でだれかの命が助かるからです。では、もし脳死後ドナーカードを書いていなければ、臓器提供をするかしないかの選択権はだれにあるのでしょうか。その権利は、脳死になってしまった方の家族にあります。そして、その家族が提供するかしないかを決めることができるのです。

僕はこの作文を書いていて思いました。もしも自分のとても大切な人が脳死になってしまったら臓器をあげたくないです。だけど、自分のとても大切な人が臓器を必要としていたなら、その部分の臓器がのどから手が出るほどほしいと思います。こんなに複雑な気持ちになったことは、これまでありませんでした。

僕は、今回この人権作文を書いて、ドナーの方の家族の複雑な気持ちや臓器がほしい家族の気持ちなどについてたくさん考えてみました。そして、ドナーカードを書いた人たちは、きっと自分の臓器で、だれかの命を救いたいと思って書いたと思うから、その人達の考えは尊重しないといけないと思いました。あと、僕は十五歳になったらドナーカードを書いて、もしも脳死になったら臓器を提供してだれかの命を救いたいのです。なぜなら、自分は臓器を提供して死んでしまってもその人の体の中で自分の臓器は生き続けるし、その臓器を提供してあげた人はずっと元気に生きられるし、自分も、もし脳死になってしまった場合に、なにもせず死んでいくより、だれかの命を救ってから死ぬほうが自分もうれしいからです。

和歌山地方事務局・和歌山県人権擁護委員連合会主催
第38回全国中学生人権作文コンテスト
和歌山県大会『特別賞・テレビ和歌山賞』

人間であること

緑丘中学校一年 コノリー海シヨーン



僕のお父さんはアイルランド人、お母さんは日本人です。だから見た目が少し日本人とも違うし、アイルランド人とも違います。日本にいれば西洋人に、アイルランドに行けば、アジア人に見えると言われます。

日本で生まれて、新宮で育ってきました。今、僕の周りにいる人はずっと前から僕のことを知っていて、きっと何も考えずに、「コノリー海」として接してくれます。僕は自分のことをあまり「何人」という風に考えたことはありません。国籍は二つ持っています。でも、100%日本人でもないし、100%アイルランド人でもないです。だから、何々人というグループ分けをすると、どこにも入らないんだな、と思ったりします。

小さい頃、公園や店に出掛けたりすると、初めて会った人は僕の顔を不思議そうに見て、「外国人?」「何人?」「アメリカ人?」と聞いてきました。そのとき僕はあまりよく分からない気持ちになりました。自分が何人かが分からないし、考えたこともありませんでした。何回か言われているうちに、外であまり知らない人に会うのが嫌になってきました。公園でたくさん人が遊んでいると、見られたり聞かれたりするのが嫌で、遊ばずに帰ってきたこともありました。お父さんとお母さんに言う、「地球人やから大丈夫。気にしないでいい」と言っていました。よく分からないけど、まあそうか、みんな地球に住んでいるんだなと、思った記

憶があります。

生まれた場所や見た目は少し違ってても、同じ人間であることに変わりはないのです。世界を一つで考えたら、どこの国の人もみんな人間です。

Aの国の人がBの国に行くと、Bの国の人から外国人と言われる。でも、Bの国の人がAの国に行くと、今度はBの国の人が外国人という立場になります。

人というものは、自分の慣れているものを中心にして、物事を考えてしまいます。逆に慣れていないものを見たときは、ちょっと抵抗があるかもしれません。慣れていないものをよく知っていくうちに、受け入れて、それが当たり前のものになっていくでしょう。

見た目の違い、男女の違い、宗教の違い、文化の違い。それぞれ、よく知らない、慣れていない、そんな理由から少し抵抗があり、受け入れるのに時間が掛かっているのではないのでしょうか。どんな違いがあっても、人間としてお互いをリスペクトしたらどうでしょう？行動に移すのはなかなか難しいことだと思います。でも、少しでも心掛けると、地球人としてもっと幸せに暮らせると、僕は思っています。

パラリンピックのことを考えてみて

城南中学校二年 福田 紗 夕



私は、四年に一度開かれるパラリンピックをテレビで見たことがあります。見る度にいつもすごいなぁと感動してしまいます。私たちがいつも当たり前のように使っている手や足で、何の不便もなく運動をして、ご飯を食べて、遊んでいること。私たちが当たり前に使っている手や足がありません。手や足がない中、現在まで、選手として活動し、どんな道を歩んできたのか不思議に思いました。もし、私が生まれたとき手や足がなかったり、生まれたときは手や足があっても、事故などでなくなってしまったら、私は、パラリンピックに出場する選手たちのようにたくましくがんばることができないと思いました。体の不自由な人たちは、何の不自由も感じず、楽しく過ごしていける強い心があっても、私ならきっと、手や足があり、自由に動き回れる人たちを見て、うらやましく思い、もし、自分に手や足があったらなど、みじめな気持ちになり、自分に向けられた現実を受け入れることができなかっただろうと思いました。そう考えるであろう私とは違い、パラリンピックに出場している選手たちは、自分の体を愛し努力し、身体障害者という現実を受け入れて、競技に挑んでいます。そんな姿を見て私はすごいと感じました。

パラリンピックの中にもいろいろな選手がいます。例えば、片方のうでがない水泳選手。この人の場合、片方のうでがないので、もう片方のうででしか水をかくことができません。片方のうででしか水をかくことができないので、普通に考えると、左右のバランスがとりにくく、どちらかの方向に進んでしまい、だんだんと

はしっこを泳ぐかたちになってしまいます。他にも、片方の足がない陸上選手の場合、片方の足だけで走ることはできないので義足をつけて走るようになります。いくら義足をつけて走ることができたとしても、やはり、走りにくいのは当然のことです。でも、パラリンピックに出場する片方の方で足がない人たちには、もう片方の方で足があります。右の方でなければ左の方がある。左の方でなければ右の方がある。両方でや両足が使えない人たちだって私たちと同じように希望を忘れず、夢を持ち続けているのだと思います。私は身体障害者ではありません。だから、身体障害者の気持ちは正直分かりません。でも、こんな私でもわかることはあります。手や足の不自由な人、目が見えない人たちを身体障害者という。でも同じ希望を持っている同じ人として、私たちと違うと区別してはいけないと思いました。人はそれぞれ個性があつて当然で、体の不自由な人、そうでない人がいることは当たり前です。その個性を愛して生かすことで人は輝ける私は思います。

私は、パラリンピックのこと、身体障害者のこと、もし、自分が身体障害者だったらなど、こんなにくわしく考えてみたり想像してみたりしたことはありませんでした。初めてこれだけくわしく考えてみて、パラリンピックに出場している選手の方々はこんなにもたくましく、輝いていることに改めて気づかされました。これからは、身体障害者の方に出会った時などは、親切にすることを心がけようと思いました。自分が親切にするだけでなく、差別していたり、からかって笑う人たちを無くしていきたいと思いました。もしも、そんな人たちを無くすことができれば、この世の中は、もっと良くなると思います。

いじめについて

熊野川中学校二年 中川 怜 大



ときどき、ニュースでいじめに関するのを見る。ひどいいじめを受けた人が、自殺してしまったニュースを見たことがある。なぜ相手を自殺させるほどのいじめをしてしまうのか気になったので、この作文を書くことにした。

7年ほど前、滋賀県大津市の中学二年生の男子が、いじめを受けて自殺したという事件があった。僕は当時小さかったので、そのニュースは知らなかったが、数年後に自殺した大津市の男子中学生のニュースをテレビで見て内容を知った。体育館で同級生に手足をしばられ、口を粘着テープでふさがれたり、なぐる、けるなどの暴行を受け、その後男子生徒はマンションから飛びおり、自殺したらしい。今の僕と同じ中学二年生だ。ひどいいじめだ。

いじめは、すぐく小さな事から始まると思う。無視をしたと間違えられたり、というっかり誰かの秘密をもらってしまったら、ラインでのちょっとしたいたずらからいじめにつながったり、どんどんひどくなっていくのだと思う。いじめはいけないと心の中で分っていても、つい同級生が何人か集まったら気持ちも大きくなり、周りに流されてしまう。僕も、ちょっとした冗談で友人を傷つけてしまったこともある。その時は謝って仲直りできたが、もし相手が自殺をしてしまったら、もう謝ることも話をするのもできない。一生後悔することになってしまう。もし、誰かを傷つける可能性がある時は、相手がもし自分だったらどう思うか、いじめられている人と自分を置きかえることが大切だと思う。自分がされて嫌な事は、相手に決してしてはいけない。

いじめられていた人の同級生の中には、いじめを止めてあげたいと思う人もいただろうが、いじめを止めたり先生に言ったら自分までいじめられるかもしれないと思い、言えなかったのだと思う。もし、僕がいじめられていた人の同級生だったら、いじめを止める勇気はなかったと思う。一人で止める勇気がなかったら同じように思っている仲間数人で、勇気を出していじめている人についてみたり、親や先生などに相談したり、行動に移していくことが大切だと思う。

言葉の力

高田中学校二年 添 谷 梨 桜



言葉には、いろんな力があります。人を勇気づける言葉、うれしくなる力、反対に傷つける言葉や嫌な思いにさせる力。

私の祖父、祖母は畑仕事をしています。時々、重いものを運んだりして手伝うことがあるのですが、そんな時、

「ありがとう。頑張ったね。」

と言ってもらいました。

また、田んぼ仕事を手伝った時にも、

「頑張ってたなあ。」

と言ってもらいました。

そういった言葉をもらうと、

「そんなに喜んでもらえるなら、次に何かするときも手伝おう。」と思います。

自分は普段から、こういう言葉は気をつけよう、とあまり深く

考えてはいません。でも何気ない言葉や、改めて考えなくてもできている言葉というのはあると思います。

十月、道徳の授業で、「言葉惜しみ」という話を学習しました。困っている人が慌てていて、申し訳なさそうにしているときに言った「どういたしまして。」という言葉。トイレで順番待ちをしていたときに言った「お先に。」という言葉。どちらもたった一秒ほどの短い言葉ですが、その場を和ませる、温かくする力があるということを知りました。

また、その話の中では、呼ばれて返事をしないという場面のことも書かれてありました。例えば、病院で、いくら声をかけても無言で、かすかに首が縦に揺れただけの反応。そういったことを「言葉惜しみ」と呼ぶのだそうですが、そういったことが、現在では広く一般的な現象になっているそうです。

バスなどで席をゆずる行動。「どうぞ」の一言で相手も理解できます。「ありがとう。」でその場の雰囲気も温かくなります。もし断る場合でも、「大丈夫ですよ。ありがとうございます。」の一言で、お互いが嫌な気持ちにもならずにいれられます。

近頃ニュースでは、SNSなどを使ったトラブルなどが伝えられます。SNSは便利なものですが、顔の見えないツールとして、危険が含まれています。自分が思ったことは違ったニュアンスで、相手に伝わることもあります。また人の気持ちを考えずに気軽にコメントをしたりすることで、誰かを傷つけてしまうという力も、言葉にはあります。

私は、自分の思いを誰かに伝えるということは、どちらかと言えば苦手な方です。言いたいことはあるけれど、「それを言ったら後悔するかなあ。」など考えてしまっています。昔は「言うんじゃなかった。」ということがよくありましたが、最近はあまりありません。

言葉はたとえ短い言葉でも、相手を勇気づけたり、温かい気持ちにさせます。反対に嫌な思いにさせることもあります。特別意識するわけでもなく、私は他の人を勇気づけられるような、いい言葉を使える人間に、これからなっていこうと思います。

今の僕から一步踏み出そう

近畿大学附属新宮中学校二年 岡 寄 凜太郎



僕は、朝晩、太地から新宮まで、電車で通学している。途中の駅から、お年寄りが乗ってくるのを毎日のように目にする。電車通学を始めて二年目になるが、僕は一度も席を譲ったことがない。長距離の通学で、僕も席に座っていたいという気持ちや、譲ろうとして断られるのが怖いというのもあるが、最大の理由は、知らない人に声をかける勇気がないというものだ。僕は、普段自分から人に声をかけることが少ない。知らない人に自分から挨拶したり、まして声をかけたりするなど、最も苦手とすることだ。だから、いつも誰かが席を譲る様子をだまって見ている。時に断られることがあっても、別の日にまた席を譲っている姿を見かけることもある。「すごい人だな。僕だったら絶対無理だ」と思う。知らんふりして、腰を掛けている自分のことを「冷たい人間だなあ」とも思う。

毎朝、駅までは母に車で送ってもらう。その道中で、地元の中学へ通う友達とよくすれ違う。彼は、小学生の時に一番親しかった友達だ。早朝なのに、いつもさわやかな笑顔で手を振ってくれる。朝が苦手な愛想のない顔で座っている僕だけど、彼に会うと

いつもあたたかい気持ちになり、手を振り返す。大寝坊したある朝、母に小言を言われながら駅に向かっていった。いつものところに彼がいた。彼は、にこやかに手を振っていたが、いつも以上に不機嫌だった僕は、手を振らないばかりか、手を挙げることもせず、無視してしまった。時間がたつにつれ、罪悪感がこみ上げてきた。自分がされたらどうだろう。意味が分からなくて戸惑うだろうし、とても腹が立つだろう。その後、彼と会ったとき、その時のことは何も言わず、いつも通りに接してくれた。ほっとすると同時に、二度と同じような態度はとるまいと反省した。

先日の朝は、地元の駅で大勢の人が立ち、あいさつ運動が行われていた。知らない人が多く、一瞬ひるんだが、小学校の時に世話になった校長先生が僕を見て駆け寄ってきて笑顔で温かい声をかけてくれた。硬い表情だった僕も自然と笑顔になり、「うれしい。今日もがんばろう」という前向きな気持ちで一日のスタートを切ることができた。

普段の僕は、人から見ると、愛想が悪い人らしい。「どこか調子が悪いの」「何かよくないことあったの」「目つきが悪いよ」などと言われることがある。自分では、普通にしているつもりなのだけれど。また、説明不足だったり、言葉足らずだったりするため、周りの人に予定や思いがきちんと伝わらず、迷惑をかけたり、困惑させてしまったりすることもある。そんな時は、一瞬、あっと思うけど、「まあいいかな」と流してしまうことが多かった。

僕の友人の一人は、そんな僕とは対照的で、いつもにこやかに過ごしていて、周りに対して気を配ったり、進んで声掛けをしたりできる人だ。クラブ活動やクラスでのグループ活動の時には、積極的な彼に助けられることも多い。彼といっしょに過ごすのは楽しいし、彼のことをいい奴だなと思う。でも、人それぞれタイプがあるから、彼のように行動するのは無理だなあと思い込んで、

彼に頼ってしまっている自分がいる。

今の自分をこうして見つめ直してみると、僕って自分勝手だなあと感じる。普段から周りの人に支えてもらったり、元気づけてもらったりしているのに、自分からは周りの人に対して返すことができていないからだ。そればかりか、自分の気分で人に対応してしまうこともあるし、気づかないうちに人を嫌な気持ちにさせていることもあるかもしれない。これではだめだなと思う。

人の気持ちを考えること、思いやりのある行動をすること。当たり前のようにでなかなか難しいことだ。正解は分かっているけど、行動に移せないことはたくさんある。

いきなり自分を大きく変えることはできないだろう。でも、自分がしてもらってうれしかったことの中から、自分にできそうなちょっとしたことを行動に移してみる努力はできるだろう。そうして、身近な人とかかわりを大切にしていこうと思う。

いつも無愛想に見えているらしい僕。まずは表情をゆるめることから始めてみよう。

祖母の笑顔

光洋中学校二年 尾原 大和



日本は超高齢化社会へと突入し、これからどんどん高齢化社会は進んでいくとテレビを見ているとよく耳にする。僕の住んでいる地域もお年寄りはとても多い。僕はいままで何も考えていなかったけど、今回作文を書くことになって毎日のなげない生活を少しでも意識しながら過ごすことにした。

僕がよく行く駄菓子屋のおばちゃん。小さい頃から毎日のように行っている。最初はお菓子を買うだけだったけど、今はとても仲良しで、僕たちに焼きそばを作ってくれたり、バーベキューも一緒にした。学校の話をしたり、おばちゃんの孫の話を聞いたり、時間が経つのもあっという間だ。僕は思った。両親が仕事で忙しい時は、おばちゃんがいてくれたから、安心できたことや、知らない間に自分にとって存在が大きくなっていることを。僕はこの間スイカを届けた。とても喜んでくれて嬉しかった。

僕はいろんな意味で僕たち若者と高齢者が交流する場が増えたら、互いに必要とし、高齢者の人たちが毎日に生きがいを感じたり、孤立していかないと思う。高齢者が毎日の生活の中で、素晴らしい環境となるように、社会全体で考えなければいけない。そのためにもまず、自分達が住んでいる地域の町作りからだと思う。難しいことはまだ僕には分からないけど、僕は駄菓子屋のおばちゃんに出来るだけ会いに行きたい。そして、日頃から、思いやりのある行動、発言を心がけていきたい。

僕の祖母は今年で九十歳になった。天気の良い日には畑で野菜を育てたり、海に行つて貝などを採ったりしている。とても元気で明るくてまるで太陽のようだ。共働きの両親にかわり、幼い頃からそばで僕を温かく見守ってくれている。祖母がいてくれたからさびしくなかったし、一緒にかるたをしてくれたり、祖母の手作りのカレーは僕の一番の好物だ。入学式も運動会も卒業式もいつも祖母はだれよりも楽しみにして来てくれた。僕が中学一年の夏、祖母と僕達家族と、どうしても祖母が行きたいとずっと言っていた伊勢に行ってきた。伊勢神宮はとても壮大で、建物も立派で、すごい大木もいっぱいあって、とてもびっくりした。祖母は手をあわせて必死に拝んでいた。きっと、いつも僕達のことを思ってくれている祖母のことだから、一生懸命自分のことより、僕達

のことをお祈りしてくれているんだろうなと思った。祖母は、獅子舞を買いたいというので一緒に探した。僕はどうして獅子舞なんかほしいのかなって思ったけど、祖母はすごく喜んでた。守り神として祖母は大切にするんだと言っていた。僕達の伊勢旅行はとても楽しかった。夏休みの思い出のひとつになった。

僕は祖母と旅行したことを思い出し、高齢者にとって住みよい、安心して暮らせるには社会全体でもっともっと真剣に考え、取り組んでいかなければいけないと思った。バリアフリーのみならず、ユニバーサルデザインもすばらしい。バリアフリーとユニバーサルデザインは発案されたきっかけや背景は大きく違うけど、事業や整備はよくにている。身の回りにあるユニバーサルデザインを探してみると、自動ドアや、歩道や公園出入口の段差解消などたくさんあることに気がついた。高齢者はもちろん、できるだけ一人でも多くの人々にとって快適で暮らしやすい社会の実現に向けてもっともっと普及してほしい。

核家族化で親や祖父母と離れて住む家族が最近では増えている。でも、まずは自分達ひとりひとりが自分の両親や祖父母を大事にして責任をもっていくという強い自覚と意志が大切だと思う。僕はまだはっきりとは決まっていけないけど、将来、高齢者と若者が共生していける手助けができる仕事に就きたいと考えている。そのためにも中学校でしっかり学んでいきたい。今の自分にできることは何かと常に考えながら行動していけたらと思う。

僕の祖母は本当に優しく温かい。あれだけ喜んで大切にしていた獅子舞も、お姉ちゃんが大学受験だからと手渡していた。今度は僕がいつかでっかい獅子舞を祖母にプレゼントしてあげたい。だから、これからも元気で長生きしてほしい。祖母やたくさんの人々が笑顔で過ごせる環境を目指したい。

にじいろ

緑丘中学校二年 横田

穂



「命は大切なものです」

私はその言葉の本当の意味がやっと分かりました。一つの小さな命が多くの人に愛され、優しさをもらい、大切に育てられてきたことを知りました。もちろん、命が大切なものだということは知っていましたが、命の大切さについて考えたりしたことなかったし、テレビのニュースなどで放送されていても、何の関心も持たないでいました。そんな私を変えてくれたのは、私にとってかけがえない大切な友達でした。

私は、約二年間病氣と闘っていた友達を亡くしました。病氣になっていた期間は長かったけど、本当に急な出来事でした。その友達は習い事先の友達でした。習い事を始めた時に喋りかけに来てくれた友達の一人です。年齢も学校も違うけれど、休みの日はほぼ毎日一緒でした。それくらい仲が良いです。

私が病氣のことを知ったのは、少し経った後でした。私はとてもショックを受けました。せめて連絡だけでも取りたいと、メールを送ったりしていました。それから少し経ち、連絡も取れない状態だということも知りました。すごく大変な病氣なんだと気付きました。

友達は節分の日にお風呂で倒れてしまい、寝ている状態で原因不明の病氣と闘っていました。元気で明るい友達だったので、聞いたときは悲しかったし、信じたくないという気持ちが大きくありました。節分が大嫌いになりました。

私は、友達のことを考えてたくさん泣いたり、何か出来ること

はないか考えました。私は友達に会いに行けないので、他の友達と一緒に、声でメッセージを送りました。毎日私の声を聞いてもらいました。そして、皆で千羽鶴を一羽一羽大切に折りました。きっと想いが伝わったと思います。

友達が亡くなった日、私は遠くに出掛けていました。帰る途中、サイレンが鳴り、私は目を瞑って手を合わせました。帰った後、お母さんに呼び出され、その事を聞きました。こんなことが身近で起こるんだと、改めて命の大切さについて学ぶことができました。辛くて悲しい学び方だけど、絶対に忘れない学び方でした。

私はすぐに会いに行き、二年ぶりに顔を見ました。薬の副作用で顔が腫れていました。すぐく変わってしまったけど、間違いなくその友達でした。久しぶりの再会、亡くなった事実、涙が溢れてどうすることもできませんでした。この二年間伝えなかった「ありがとう」をたくさん伝え、抱きしめました。私が知らない間に成長していて、私よりも身長も髪も伸びていました。私は大切な人の最後まで側に居させてもらいました。

私にとってこのような経験は初めてで、すごく悲しくて辛くてどうしようもなかったです。でも、友達が病気の間、いつ戻ってきてても良いように、いつも通りに過ごしました。辛くなったら、たくさん泣きます。でも、辛いのは友達の方なんだとお母さんに言われ、友達が出来ない事は私が頑張ろうと思うようになりました。

友達には、ダンスの先生になりたいという夢がありました。夢を叶えるために頑張ったけど、叶えることが出来ませんでした。でも、私達にはまだたくさんのチャンスがあります。私は友達の夢と一緒に自分の夢を叶えるために頑張りたいです。

私はその友達と一緒にしたいことや話したいこと、約束がたくさんありました。もう果たせない約束の方が多くあるけど、いつ

か全て果たせると信じています。

「命は大切なものです」

その言葉の本当の意味を友達が教えてくれました。絶対に忘れず、これからも友達に会える日が来ることを信じて、自分の命も、他の人の命も、二人で過ごした日々も大切に生きていきます。

自由な社会

近畿大学附属新宮中学校二年 矢萩

舞



最近、私はよくテレビのニュース番組で「いじめ」や「虐待」の言葉を耳にします。どうして人は人を傷つけるために自分の力を使ってしまおうのでしょうか。そして命を粗末に扱ってしまうのでしょうか。

中学校に入ってから、私はよく友達について考えるようになりました。別の小学校から来ている人が多く、私は友達を作ろうと頑張りました。そして、友達ができて楽しい生活を送っていました。でも、嫌なこともありました。これを聞いた人は「相手に嫌だといえ方がいいのに。」と思うでしょう。でも私にとっては、せっかくできた大事な友達です。私は友達に嫌われたくないと思い、嫌だと言えずニコニコしていました。世の中には私のように心の中では「嫌だ」などと思っているけど、嫌われるのが怖くて言えずに一人で悩んでいる人がたくさんいると思います。このように我慢していると、人間なので限界もあります。もし限界を超えてしまったら、自殺に追い込まれる場合もあります。そうしてやっている側は気付かないあいだに「いじめ」になっているというこ

ともあり得るのです。こうならないためには、自分がやられて嫌なことは人にやらないということが大切だと私は思います。自分がやられて嫌なことは他の人にとっても嫌なことのはずです。逆に、自分がされてうれしいことは他の人にしてもよいと思います。

この考え方をさらに深めることができたのが、学校で行われた「人権教育講演会」です。講演では、「ひとりひとりがお互いに尊重しあい、みんなの人権を意識することが自分自身の人権を守ることにつながる。お互いが相手の気持ちを考え、思いやりをもつことが大切。」ということを学びました。一度、相手の気持ちになって考えてみるということが大事だとあらためて思いました。

そして、「虐待。」これを絶対にしてはならないことだと私は思います。なぜなら、赤ちゃんや幼い子供は力がとても弱いからです。もちろん、大人の力になんて勝てるわけがありません。にも関わらず、赤ちゃんや幼い子供に暴力を振るう人は本当にひどいと思いました。ニュース番組でも、「三歳児が死亡。虐待か。」などというニュースを見ることが少なくありません。私はもっと命を大切にしたいと思っています。

私はよく買い物に行きます。そのときにどこにでもあるのが「国際シンボルマーク」とも呼ばれる、車椅子が必要な方や、障がいをもった方が車を止められる場所です。体の不自由な方が少しでも店舗まで近くなるようにつくられたスペースのはずです。しかし最近、よくそこに若い方や荷物を積んでいる人が停車しています。その人たちでそのスペースがうまっていることもありま

す。私はどうしてそんなことができるのかなと不思議に思います。何も考えず、そこに車を停めている人たちは、他の人のことを考えるべきです。自分たちの歩く距離がそんなに変わらなくらい少し増えるだけで世の中の体の不自由な方々の負担が減ります。駐車場の問題だけでなく、点字ブロックの上に乗って遊んでいる

人や、かばんを置いている人もいます。もし、目の不自由な方が歩いて来たらどうするのでしょうか。私はこのように、「もし」とあらゆる状況を考え、「自分さえよければそれでいい。」「自分が優先だ。」という考え方を減らしていくべきだと思います。こういう公共の場所は自分だけが使っているわけではないのです。人にとって迷惑にならないように行動するべきです。

本当の友達

城南中学校二年 近藤

杏



私には、自分が素直でいれる友達がいます。小学生のときに、その友達と出会いました。初めは、そんなにその子のことが好きじゃなくて、たまに話すぐらいだったのですが、なぜか急に仲良くなりました。学校に毎日一緒に行って、放課後もよく遊んでいました。でも、その分、たくさんケンカもしました。お互い本音を言い合ったからこそ、さらに仲良くなれたのかなと思います。その子が転校していくことになり、引越していく前日にサヨナラを言いとその子の家に行きました。最後の日は思えないくらい、いつも通りの話をして、お別れをしました。私は笑顔で手を

振ることができたけど、本当は少し辛かったです。これが、私の本当の友達との出会いと別れでした。いつかまた、その友達と会って、一緒に笑える日が来ることを願っています。

私はよく、耳にする言葉があります。それは、「友達は数より質」という言葉です。私はとても、その通りだなと思います。たくさん友達がいっても、みんな上部だけの関係の友達なら、それは友達の意味がないと思うからです。私なら、たった一人でも自分のことを分かってくれて、その友達のことを思えるような関係を築ければなと思います。

私はこれからの人生でいろんな人と出会っていくときに、ひとつの出会いを大切にし、たくさんの方の性格を知って、その人の良いところをたくさん見て、好きになっていけたらなと思います。でも、その人の嫌なところが見えてくるときは、仕方がないと思うので、その人とは、お互いに合った付き合い方をしようと思います。

私は人との出会いで、人の人生は変わると 생각합니다。例えば、気が合う人、好きなものが一緒の人とは、それを共有して仲を深め、好きなものが真逆の人とは違う意見を教えてもらい、そういう考えもあるんだなと、その人を理解していくことが大切だと思います。

でも、一番ちゃんと付き合い方を考えなくてはいけないのは、仲が良い人だと思います。仲が良い人には嫌われてもいい覚悟で、その人にとって良いこと、自分が思ったことを言うていくことが、本当の友達になるときに大切なことだと思います。そのときに、言ってくれたことに感謝して、あの人には自分をより良くしてくれる見方をもっていると思うようにして、どんどんいろんな人と仲良くなり、本当の友達を作るための大切なことだと思います。

私はこれから、いろんな人を知って、自分から積極的にいろんな

な人と関わって、本当の友達とこれからも仲良くしていきたいです。

不登校と人権

近畿大学附属新宮中学校二年 堀内輝之



日本では不登校の小中学生は、何人くらいいるのでしょうか。文部科学省の調査によると。平成二十八年度の小・中学校における長期欠席者は約二十万人、このうち不登校児童生徒数は十三万人だそうです。なんと、十四人に一人が不登校になっていて、年々増え続けているそうです。

私は中高一貫の中学校に入學して、ある友人と出会いました。同じクラスになり、好きなアニメの話で気が合って、すぐに仲良くなりました。しかし、キャンプの後で体調を崩してしまい、それが原因で学校に来なくなりました。私は、メッセージアプリを使って、その友人に「大丈夫？」や「学校来れそう？」と伝えました。すると、「体調は大丈夫だよ。」や「もう少し時間がかかりそう。」と答えてくれました。私は、最初のうちは、すぐに学校に来るだろうと、あまり心配していませんでした。しかし、二ヶ月も過ぎた辺りから、だんだん心配する気持ちが大きくなっていました。クラスのみんなも心配していて、他の友人から、休んでいる間の勉強の進むスピードが速過ぎて、遅れを取り戻すために自宅で勉強していると聞きました。私は、がんばって遅れを取り戻して、一日も早く学校に戻ってきて欲しいと思っていました。二年生になって、メッセージアプリで会話していた時に、「月

曜日から行ける。」と答えてくれました。私は、とても驚き、とても嬉しくて、彼が学校に来られるようになったことを一緒に喜びました。彼は、約一年間学校を休みました。もしも、私が体調を崩して長く学校を休むことになったら、彼と同じように学校に行けなくなっていたかもしれない。一年間彼は、どんな思いで過ごしていたのでしょうか。早く学校に戻れるように、勉強を頑張っていたのだと思います。中高一貫校だから、ほんの数日休んだだけでも、進むスピードが速く、勉強の内容も難しいため、追いつくまでに時間がかかります。みんなと授業を受けるより、一人で勉強を続けることは、本当に辛い苦しい日々だったでしょう。今は、彼が授業を受けられるようになって、本当に良かったと思います。

日本には、彼のように立ち直れずに、今も不登校のまま過ごしている小・中学生がいます。彼らを、不登校児童生徒といい、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間三十日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由によるものを除いたもの」と定義されています。不登校になったきっかけは、友人関係や教師との関係をめぐる学校生活上の問題が約三割、病気など本人の問題が約三割、家庭生活上の問題が約二割だそうです。また、不登校が継続している一番の理由に「本人の不安」があり、学校に行けなくなったりきつかけから、問題が解決しても不安で不登校から抜け出せない状況があります。不安は人それぞれで、一度抱えてしまうと悪いことしか考えられなくなり、とても恐く、不安から離れられなくなると思います。一人で抱え込まず、両親や友人など一番身近な人と話すことで、その不安は少しでも軽減されるのではないのでしょうか。周りの人たちは、学校に行けない状況を責めずに受け止め、無理に学校に行かなくても良

いと伝えたり、体調を気遣ったりすることで、その人の心をサポートすることが大切です。学校に行けば、待っている友達が居る、やりたいことがあるなど、希望を持てることで、その人の意志を強くすることができ、立ち直るきっかけになるのではないかと私は考えます。

今、インターネットが普及して知らない人と簡単に話せる世の中になり様々な問題も起きていますが、そのインターネットを利用して人とつながることができます。会うことができなくても、メッセージのやり取りを通して、友達同士で励まし合うこともできます。顔が見えず相手の反応が分かりづらいため、メッセージの内容や言葉に注意しなければいけません。そのメッセージを通じて希望を与えることができれば、不登校を止めるきっかけになるのではないかと考えます。人とのつながりは人生においても大切であり、人とつながることでお互いに支え合うことができるのではないのでしょうか。

世界の子どもを助けるためには？

熊野川中学校三年 永谷 邦満



僕がこの作文を書くと思った理由は、ニュースやテレビ番組で人権について放送していたからです。世界では、食料が少ない、水が汚れている、病気を治せない、若い子が亡くなっていくという問題が発生しています。

この問題はある意味つながっています。例えば水が汚れているという事は病気が発生しやすいということです。でも病気は治せ

ません。なので若い子どもたちが亡くなっていくということです。この問題を解決するには以下の事が必要だと感じました。まず世界が協力すること、そして支援することが大事だと思います。でもそれができていないために今も世界のどこかで誰かが苦しみ悲しんでいるのです。

僕はこの事についてもっとくわしく調べてみることにしました。すると初等教育をうけられない子が約五千九百万人いてその五十％の人が紛争や過酷な暮らしをいられているそうです。正直僕が最初に思った事は「僕たちはこんなに幸せな暮らしをしているのか？」ということでした。なぜなら僕たちが少しでもこの幸せを分けてあげれば助かる命もあるだろうし、おなか一ぱいにご飯を食べることができるだろうと。僕はあることを忘れていました。それは唯一この幸せをプレゼントできる方法です。それは募金です。みなさんも募金という言葉は聞いた事がありますよね？

この事についても、もっと深く調べてみることにしました。すると一度に五千円を寄付すると子ども一人に栄養たっぷり給食を一年間届けることができるそうです。他にも三千円を毎月一年間寄付すると緊急事態に、命をつなぐ栄養強化ビスケットを千二百人に届けることができます。僕はまだ子どもなので募金するお金はもっていませんが僕も大人になったらしてみたいと思います。

それでは話をまとめたいと思います。世界には助けられる多くの子どもたちや命があるという事、募金があればそれを実現できるという事です。

僕はこの事を調べたことで世界の現状を知ることができよかったと考えました。僕も少しでも世界の子どもたちを助けられるように募金をしていきたいと思います。みなさんもこの子どもたちが平等に暮らすために協力や支援をお願いします。

いじめはなぜなくなるのか



光洋中学校三年 小林 莉子

今でも昔でも、ニュースでしばしば聞く問題が「いじめ」です。「いじめ」を受けていて自殺をしてしまったなど、残酷なニュースが流れているのに、「いじめ」のニュースはなくなりません。こんなに私と同世代ぐらいの人たちの尊い命が犠牲になっているのに、どうして「いじめ」はなくなるのでしょうか。

それは、その人がいじめているつもりではないけれど、いじめになる場合があるからではないのかと考えました。「いじめてやろう」と、いじめている人もいます。受ける方は、それが「軽い冗談のつもり」と思っていますが、いじめている人も何倍も傷ついている場合もあると思います。

私も「軽い冗談のつもり」で言っていたことが、相手を傷つけてしまっていることもないとは言いきれないと思います。自分はそのつもりじゃなくても、知らないうちに加害者になっているかもしれません。なので、自分が加害者にならないために、少しでも傷つく人が減るために、友達も加害者にならないために、私にも小さいことだけど、気をつけたり、何かできることがないか考えました。

まず一つ目は、自分が言われたりされたりして嫌かを考えるのではなく、相手の身になって考えて発言したり行動したりすることです。それは、自分がされて嫌じゃないかを考えても、相手は嫌かもしれないからです。私も、自分を基準にして考えているところがあつたので、これからは相手の身になって考えようと思います。

二つ目は、いじめの現場に立ち会ったら、勇気を出して行動するということです。それは、その勇気がたとえ小さくてもいじめられている子を救うとこでできる第一歩になるかもしれないからです。見て見ぬふりは、見て見ぬふりをした人も、いじめている人と同じになります。なので、私は、いじめの現場に立ち会ったら、勇気を出して行動を起こそうと思います。

三つ目は、嫌いな人をつくるのではなく、好きな人をたくさんつくるということです。それは、誰でも嫌いな人にはきつく当たってしまったり、その人というのが不快だったりすることがあると思うからです。きっと嫌いな人と不快な気持ちでいるより、好きな友達と楽しくいた方が、いじめは少なくなると思います。

この作文がきっかけで、改めて自分も気をつけないといけないことと向き合えました。この考えが、いじめを少なくできたらきっとニュースでこの問題を聞くことが少なくなると思います。そうなれるように、これからも気をつけて学校生活を送ろうと思います。

私の人生



和歌山地方方法務局・和歌山県人権擁護委員連合会主催
第38回全国中学生人権作文コンテスト
和歌山県大会『最優秀賞・和歌山地方方法務局長賞』

緑丘中学校三年 小西 柚

私は中三になってすぐに、「第一腰椎椎体破裂骨折」という怪我をし、その影響で脊髄損傷となりました。手術は二回行い、手術前に「十代の女の子の症例が少なく、どれだけ回復するかは分か

りません。もう自分で立つこと、歩くこと、そして排泄のコントロールは出来ません。良くて車椅子生活です」と言われました。

脊髄損傷とは、脊髄が圧迫されることにより、身体が動かなくなったり、麻痺したり、排泄のコントロールが出来なくなったりと、神経にダメージを受けたことにより障害が起こります。現在の医学では治療法が無く、一度損傷した神経は二度と戻らないとされています。

怪我をしたばかりの頃、下半身は全く動かず、痺れが強く、少し触れるだけでとても痛みました。ドクターヘリで和歌山県立医科大学附属病院へ救急搬送され、緊急手術となりました。二回目の手術が終わって落ち着いた頃、元の学校に戻るのには難しいからと、施設や支援学校の話をされた時、「どんな姿でも自分で歩けるようになって、元の学校へ復学する」そう決めました。

転院する時、私がいた小児科病棟の師長さんに、「脊髄損傷者で八年かかって歩いた人を見たことがあるから、諦めずに頑張って」と言われました。

私は諦めずにリハビリを続け、二ヶ月で短下肢装具とロフトランドクラッチという杖で歩けるようになりました。そして、四ヶ月目で普通の杖で歩けるようになりました。この短期間でここまでの回復は珍しいと色々な人達から言われました。そして、元の学校に復学出来るようになりました。でも私は満足していません。完璧でなくても、少しでも前のように歩けるまで、満足は出来ません。

今の私は、脊髄損傷により下半身のほとんどが麻痺していて、触っている感覚や痛み、温度が分からなかったり、両膝から下が常に痺れていて、足首や足の指は動きません。でも麻痺の副作用の痙性で、自分の意思とは関係なく勝手に突っ張ったり、足の指が動いたりします。そして膀胱直腸障害により、排泄のコントロール

ルは薬を服用してコントロールしています。

怪我をする前に比べて出来ない事は沢山あります。だから手伝わってもらわないといけないことが多々あります。でも手伝わってもらったのが当たり前だとは思っていないし、私に出来る事で恩返ししたいと思っています。「可哀想」と思う人もいると思うけど、そんな風に思っただけは嫌いです。だって、全然可哀想なんかじゃないから。ただ周りの皆と比べれば少しハンデがあるだけで、私は私、皆と同じ人間だからです。

「何でそんなに前向きに頑張れるの？」とよく聞かれます。私が前向きに頑張れる理由は、「一緒に頑張ろう」と声を掛け、サポートしてくれる人が周りに沢山いるからです。

脊髄損傷者になってから、今まで当たり前に出ていた事が出来なくなっただけで、冷たい言葉を投げかけられたり、辛い事もあるけれど、辛い事だけではないし、同じ境遇にいる人達の気持ちが、自分自身が経験した事で分かるようになって良かったと思います。辛くても、辛いと思って過ごしているこの時間は、私の人生においてほんの一部なのです。自分の人生は自分で変えていきます。しかし、私は脊髄損傷というものと、これから先ずっと共に付き合っていかなければならないのです。例えどんなに辛くても、それでもたった一つの私の命だから、たった一つの私の人生だからこそ、一番私らしい人生を築いていきたいと思っています。

言葉

城南中学校三年 傳田 未咲



私たちは生活の中で、「言葉」を交わし合って生きている。その言葉には大きくわけて二つの効果があると私は考える。

一つ目は、嬉しくなる言葉。例えば、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝える時。感謝されていやな気持ちになる人はいないし、言われて嬉しい。また、相手からほめられたり、相手の良いところを見つけて言うと言った自分も嬉しいし、相手も嬉しくなる。

二つ目は、傷つく言葉。例えば「死ね」という言葉、もちろん言われればどんな人でも傷つく。しかし、私は最近よくこの言葉を軽々しく口にしてる人や動画サイトのコメント欄でもよく見かける。私も最初はそんなに気にしていなかった。ところがある日、私の考えを大きく変える出来事があった。二十二歳という若さで胃がんになり亡くなった人がいた。その人には大きな夢があり、その夢があと一歩で叶うというところで亡くなってしまった。私はその時、生きたくても生きられない人がいるんだと感じた。そんな人が『死ね』という言葉を聞けばどう思うだろうか。私なら絶対に嫌だし腹が立つ。そこで私は、絶対に軽々しく「死ね」などと言ってはだめだと思った。

また、言葉やネットの書き込みによるいじめで、自殺した人も多くいる。自分から命をたってしまうほどだったのだ。実は私の姉も中学の時、いじめにあっていた。その時もラインなどでひどい事を言われたそう。私はその時の事を正直あまり覚えていない。しかし母が言うには、めったにつらい顔をせずいつも笑顔でいる姉がとてつもらそうにしていたと聞いた。私はその話か

らいじめや言葉とは、それほどまでに人を追い詰めてしまうものなのだと感じた。だから、私は、軽々しく「死ね」と口にする人や平気でラインやネットなど、相手の顔が見えない事を利用して、悪口を書く人の事が許せないと思った。だがそれは、知っている人にかぎった事ではない。例えば、ネットに芸能人などの有名な人に対して悪口を書く人もいる。もう一度言うが、「ネット」というのは相手の顔が見えない。それをいいことに、SNSに悪口を書き込む人が多くいる。相手の気持ちを考えず、ひどい事を言っている人がいて、そういった人たちも私は許せない。

言葉一つで、人は元気になったり嬉しくなったりする。しかし反対に使い方をまちがえれば、人を傷つけ、時には命を奪ってしまう。言葉のもつ力は大きいのだ。それが良いところでもあり、逆に怖いところでもある。

この世界からいじめがなくならないのは言葉があるからだと思う。しかし、言葉無くすわけにはいかない。例えば包丁で人を殺した人がいるとする。では、殺人事件を減らすためにこの世から包丁を無くすのかと言われればそうではない。ようは使い方の問題なのだ。包丁はヒトを殺すのではなく料理をするためだけに使えばいい。言葉も同じだ。いじめをなくすために言葉をなくすのではなく、言葉の使い方を改めるべきだ。一人ひとりが言葉の重みを考え、相手の事を思い発言したり、ネットに書いたりすること、言葉が人を殺す凶器になることは無くなると私は考える。

相手に素直に感謝の気持ちを伝える。相手の良いところをほめる。相手がルールをやぶれば、「ダメだよ」と優しくしかってあげる。そういった言葉の使い方を一人ひとりが心掛けていけばいじめも減っていくと思う。

まずは、私から、相手の事を思い、言葉の重みを考え発言して

いきたい。

言葉が人を殺す凶器となり、傷つく人がいなくなる。そして、言葉の力で笑顔になる人が増えていく、そんな社会にするために。

